

2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部	准教授	吉村 美路
最終学歴	学位	専門分野
立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科	修士	社会心理学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

時代に合わせた新たな技術、価値にアンテナを立て、常に知識のアップデートを行いながら教育活動に従事する。専門分野について深く洞察できる視点を養うとともに、多様な視点からも物事を考えることのできる知識とスキルの向上に努める。

【目標】

自ら考え行動できる人材の育成に努める。ビジネスの現場において、必要な教養、振る舞い、考え方を習得し、自他を大切にしながら社会に貢献できる人物の育成に尽力する。コミュニケーションの知識、技術を身に付け、社会における適切かつ良好な信頼関係を構築できる能力の養成を目指す。自己の個性を充分に生かしつつ、他者を尊重できる人間の育成に努める。

【方針】

理論をさまざまな社会活動の場で応用できる人間の育成に努める。目の前の課題に対し、どのような課題解決ができるのかを自ら考え行動できるよう、できるだけ多くのチャレンジの機会を作っていく。

【計画（方法）】

環境の変化に適応し、状況に応じて臨機応変に対応する能力を習得することを目指す。創意工夫を凝らしながら、困難な状況に陥っても「何ができるか」を学生自らに考させ、実践させることで、変化の激しい社会で生きる能力を養う。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

課題解決概論 a・b・c, 上級コミュニケーション論, ビジネス実務総論, 総合演習 I, 専門演習 I, 専門演習 III

（後期）

異文化コミュニケーション a・b, 国際コミュニケーション, 総合演習 II, 専門演習 II, 専門演習 IV

○教育方法の実践

学生が主体的に思考し、学びを自らの力として活用できるよう、授業ではアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた。知識を単に理解するだけでなく、「どのように実践へつなげるか」を意識しながら学べるよう、学生が自律的に考え、行動できる環境づくりに努めた。

講義では、学んだ内容を社会でどのように生かすかをイメージしやすいように構成し、学生の意見を引き出す対話的な進捗を重視した。コミュニケーション関連科目では、学生同士のワークや体験的な活動を取り入れ、手を動かしながら理解を深める学習プロセスを大切にした。

演習型授業では、学生の主体性を尊重する姿勢を基本とし、必要な枠組みを示しつつも、興味・

関心に基づく自発的な取り組みを促した。「自分にもできる」という感覚を育むことを重視し、学生が自ら学びを広げていけるよう支援した。

○作成した教科書・教材

学生配布資料および課題資料作成、講義 15 回分の PPT の作成。

○自己評価

学生の理解状況を適切に把握し、学習成果を高めるため、授業では定期的に理解度チェックを実施した。授業においては、当初設定した教育目標は概ね達成できたと判断している。自己評価の指標としては、主に以下の 3 点を用いた。

- ミニテストによる知識定着度の確認
- コメントペーパーから読み取れる学生の意欲や理解の深まり
- 授業評価アンケートの結果

学生が提出するレポートについては、その日の学びを踏まえた自分なりの考察がなされているか、また既存の知識と新たな学びを関連づけて論じられているかを重視した。特に、学生自身が「当事者意識」を持って課題に取り組んでいるかどうかを評価の中心に据えた。

演習課題においては、個人の成長を評価する軸として「状況判断力・考察力・企画力」の 3 点を設定し、チーム活動では「役割理解・責任感・実行力・全体を俯瞰する力」の 4 点を基準として支援と評価を行った。授業評価アンケートでも概ね良好な結果が得られており、学生の理解促進と成長支援に一定の成果があったと考えている。

II 研究活動

○研究課題

日本の女性のキャリア形成には何が必要か？

○目標・計画

【目標】

- ・ 国際学会への積極的参加
- ・ 論文執筆と投稿に励む

【計画】

国際学会へ積極的に参加し、日本の女性のキャリア形成を困難にしている原因について、客観的な視点からの知見を深める。ひき続き論文投稿に励む。

○2018 年 4 月から 2026 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）特記事項無し

（学術論文）

Michi Yoshimura¹ & Hiroyuki Yamaguchi² (2026) Psychological Safety as a Context-Sensitive Predictor of Retention Intentions: Gendered Effects of Supervisor Support under Caregiving-Assumed Conditions, *PLOS ONE*, in press.

吉村美路・松隈美紀・手嶋康則, 「第 4 回福岡マラソン 2017 におけるアクティブ・ラーニングの効果 –モチベーションと自主行動を考える–」, 平成 31 年度中村学園大学・短期大学研究紀要, 51 号, 2018 年 3 月.

（学会発表）

- Michi Yoshimura (2025) “Gender Stereotype Endorsement, Job Search Expectations, and Job Hunting Anxiety: Evidence from Japanese University Students International Conference on Psychology and Psychiatry, Poster Presentation, Dubai, UAE, November 2025.
- Michi Yoshimura (2025) “Paradoxical Psychological Effects of Support Quality: An Empirical Study of Parents, Teachers, and Supervisors” Poster Presentation (in English), Kyushu Branch Conference, Japan Communication Association, Okinawa, November 2025.
- Michi Yoshimura (2025) ” The Influence of Gender Structure in Organizations: A Comparative Analysis of the Effects of Adaptability on Self-Esteem and Happiness in Organizations” The 25th International Conference on Diversity in Organizations, Communities & Nations, Poster Presentation, Nicosia, Cyprus, June 2025.
- Michi Yoshimura¹ & Hiroyuki Yamaguchi² (2024)” How Does the Manner of Supervisor's Support Affect the Employment of Men and Women” 11th International Conference on Education and Psychological Sciences (ICEPS 2024) @JW Marriott Phuket Resort & Spa in Phuket, Thailand, Oral Presentation, May 2024.
- Michi Yoshimura¹ & Hiroyuki Yamaguchi² (2024) ” What Kind of Organizational Support is Appropriate for Work Retention during Life Events – From Men/Women Comparison in Japan – ,Twenty-fourth International Conference on Diversity in Organizations, Communities & Nations. @Lusiada University, Lisbon, Portugal, Poster Presentation, July 2024.
- 吉村美路 (2023) 「女性の両立葛藤と性格特性の関係について」, 日本コミュニケーション学会九州支部学会発表, ハイブリッド開催 (オンライン口頭発表), 2023年11月.
- 吉村美路 (2022), 「妻のキャリア形成納得感は夫婦間コミュニケーションにどのように影響するのか?」, 日本コミュニケーション学会九州支部学会発表, オンライン開催 (口頭発表), 2022年12月.
- 吉村美路 (2022) 「性別役割認識におけるジェンダーギャップはどこまで変化したのか? – 女性の就業への影響の視点から –」, 九州大学研究助成金採択者成果発表 2021, オンライン開催 (口頭発表), 2022年2月.
- 吉村美路 (2021) 「理想の女性像が就業継続に与える影響について」, 日本コミュニケーション学会九州支部学会発表, オンライン開催 (口頭発表), 2021年3月.
- 吉村美路 (2021) 「日本女性の労働意欲に関する調査」, 九州大学研究助成金採択者成果発表 2020, オンライン開催 (口頭発表), 2021年2月.
- 吉村美路 (2021) 「価値観が女性のキャリア継続意欲に与える影響について」, 2021年度日本ビジネス実務学会全国大会, 北九州市立大学, オンライン開催 (口頭発表), 2021年6月.
- 川越愛里・吉村美路 (2020) 「名古屋の農業の持続可能性について – 実践に学ぶ体験型学習 –」, 2019年度九州共立大学×愛知東邦大学「地域を考える研究会」, 九州共立大学, 対面 (口頭発表).
- 中村千聖・高垣怜佳・加藤亮太・吉村美路 (2020) 「地域との相互理解を目指した実践的取り組みの報告 – 地域保育園における協働制作を通じたコミュニケーション活動 –」, 2019年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会, 金沢星稜大学, 対面 (口頭発表), 2020年1月.
- 吉村美路 (2019) 「日本の女性におけるワーク・ライフ状況の俯瞰的考察」 2019年度日本コミュ

ニケーション学会九州支部大会, 福岡女学院大学, 対面 (口頭発表), 2019年11月.
吉村美路 (2018)「プロジェクトチームにおけるモチベーションの推移 —リラックス値との相関関係について—」, 2018年度 第34回産業・組織心理学会全国大会, 名古屋大学, 対面 (ポスター発表), 2018年9月.
吉村美路 (2018)「大学生における対人関係重要度に関する意識調査」, 2018年度 第60回日本教育心理学会, 慶應義塾大学, 対面 (口頭発表), 2018年9月

(特許)

特記事項無し

(その他)

- ・ 吉村美路 (2024)「仕事、結婚、幸せ — 社会心理学から女性のキャリアを考える」インタビュー記事, So-gúd (ソウグウ): 株式会社エクシード, 2024年6月掲載。
- ・ 吉村美路 (2024), 日本コミュニケーション学会 九州支部ニューズレターNo42・43 合併号, 「日本・トルコ友好の土地へ—エルトゥールル号遭難事件—」P10-11, 【書評】虎岩朋加 (著)『教室から編み出すフェミニズム: フェミニスト・ペゴタジーの挑戦』P18-19, 2024年8月刊行。
- ・ 吉村美路 (2024), 「異文化コミュニケーションを学ぶことは人間性を高めることにもつながっていく」インタビュー記事, クリックアンドペイ合同会社, 2024年10月8日掲載。
- ・ 吉村美路 (2022)「性別役割認識におけるジェンダーギャップはどこまで変化したのか? —女性の就業への影響の視点から—」, 発行物「ポリモルフィア」8号, 九州大学男女共同参画推進室, 2022年6月刊行。
- ・ 吉村美路 (2021), 「コロナ禍で見えたもの」, 日本コミュニケーション学会 九州支部 ニューズレター No. 37, P10-11, 2021年7月刊行。
- ・ 吉村美路 (2021), 「出産・育児を機会とした日本女性の労働意欲に関する調査」, 発行物「ポリモルフィア」7号,九州大学男女共同参画推進室,2021年6月刊行。
- ・ 吉村美路 (2021), 「日本女性の労働意欲に関する調査」, 令和2年度九州大学研究成果報告書, P69-P78, 2021年3月。
- ・ 吉村美路 (2018), 日本コミュニケーション学会 九州支部ニューズレターNo31.P9-10, 2018年7月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

特記事項無し

○所属学会

日本心理学会、日本コミュニケーション学会、産業・組織心理学会、日本社会心理学会、日本教育心理学会

○自己評価

本年度は、国際的な研究発信を継続しつつ、ジェンダー・組織・心理的安全性といった専門領域における研究成果を着実に積み上げることができた一年であった。昨年度の学会発表の内容を踏まえ、本年度は、上司からの支援が離職意図に及ぼす影響を、性別役割観やケア責任の文脈から検討し、組織心理学・ジェンダー研究の双方に貢献する知見を論文にて提示することができた点は大きな成果である。

また、国際学会および国内学会において複数の研究発表を行い、ジェンダー・組織構造・支援の心理的效果など、関連領域を横断するテーマについて議論を深める機会を得た。特に、ドバイ、キ

プロス、沖縄での発表では、異なる文化的背景を持つ研究者との意見交換を通じて、自身の研究を国際的な文脈で再考する視点を得られたことは、今後の研究展開において重要な経験となった。

科研費については、本年度は特記事項はないものの、研究テーマの深化と国際発信の実績を踏まえ、今後の申請に向けた基盤づくりが進んだと考えている。

総じて、本年度は研究成果の公表、国際学会での発表、学術コミュニティとの交流を通じて、専門領域における理論的・実証的貢献を継続的に行うことができたとして自己評価している。今後は、国際誌への投稿をさらに強化するとともに、学際的な共同研究の可能性を広げ、研究の質と社会的意義の双方を高めていきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

IRの成果をより実践的に活用していく体制づくり

【計画】

学生の学びや成長を可視化し支援する手段としてのポートフォリオの活用について、より具体的な運用方針・活用方法を計画し、全学的に定着させていくことが必要であると感じている。

○学内委員等

IR推進委員会

FD・SD委員会

人権問題委員会

第4期中期計画プロジェクト

強化指定クラブの運営方法等に関するワーキンググループ

○自己評価

本年度はIR推進委員会委員長として、ポートフォリオ導入や学内アンケートの見直し・実施・分析を中心に、教育改善の基盤整備に取り組んだ。他大学との共同研修会（大学連携 portfolio 相談会）やワーキンググループを通じて、課題共有や施策検討を行い、本学に適した運用方針の検討を進めることができた。

また、第4期中期計画プロジェクトでは、学園の中期的課題を踏まえ、今後必要となる施策や新たな取り組みについて議論に参画した。加えて、FD・SD委員会、人権問題委員会、課外活動ガイドライン作成ワーキングなど複数の委員会活動にも携わり、学内の制度整備と教育環境の向上に貢献できたと考えている。

総じて、学内のデータ活用体制と教育改善に向けた基盤づくりに一定の成果を上げることができた一年であった。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

- ・ 学生との地域イベント等を通じた活動を通じ、地域に貢献する
- ・ 日本コミュニケーション学会九州支部の運営に尽力する

【計画】

- ・ 地域イベントについては、学生たちの意向もとりにいれながら、どのような目的で何をしてみたい

のかを検討する。引き続き、学会運営に尽力する。

○学会活動等

日本コミュニケーション学会九州支部事務局長

○地域連携・社会貢献等

- ・ 名東区スポーツ・健康×まちづくり協議会
- ・ ゼミ3年生と平和が丘保育園の連携による園児向けハロウィンイベントの企画・実施
- ・ 愛知牧場での実地研修を通じた地域理解と課題発見力の育成(ゼミ2・3年生)

○自己評価

本年度は、地域連携と学会運営の両面で計画に沿った取り組みを進めることができた。地域活動では、名東区スポーツ・健康×まちづくり協議会への参画、規格外野菜を利用したユニセフへの寄付活動プロジェクト、愛知牧場での実地研修などを実施し、学生が地域課題に触れ主体的に学ぶ機会を提供した。

また、日本コミュニケーション学会九州支部事務局長として学会運営に携わり、研究者コミュニティの活性化に貢献した。これらの活動を通じ、地域との協働と学会活動の双方で一定の成果を上げ、当初の社会貢献目標を概ね達成できたと評価している。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・ University of Oxford, Saïd Business School; Executive Leadership Programme (Completed March 2026)
- ・ 自由民主党女性局「女性未来塾」にて、日本女性の現状について情報の共有、更新に努めた。

VI 総括

2025年度は、教育・研究・社会貢献の各領域で計画的に取り組む、学生の学びと成長を支える環境づくりを進めることができた。授業では理解度チェックやコメントペーパーを活用し、知識の定着と主体的な学習を促したほか、演習や地域連携活動を通じて、学生が社会課題に向き合いながら考察力や協働性を高める機会を提供した。

研究面では、心理的安全性やジェンダー、組織支援に関する成果を国際誌や学会で発信し、国際的視点から研究を深化させることができた。学内ではIR推進委員会委員長として教育改善の基盤整備を進め、複数の委員会活動を通じて制度整備にも貢献した。地域連携や学会運営にも継続して携わり、社会との接点を広げる取り組みを行った。

また、自己研鑽では海外大学のプログラムを修了し、組織運営やリーダーシップに関する知見を高めることができた。総じて、教育・研究・社会貢献を往還しながら、知の社会還元と学生支援に向けた実践を進められた一年であった。

以上